

小児造血幹細胞移植患児に口腔ケアを実施した1症例

○帆北友紀, 菅 北斗¹, 辻井利弥¹,
鉛山光世, 稲田絵美¹, 山崎要一¹, 下田平貴子
(鹿大 病院 歯科衛生部門, ¹鹿大 院 小児歯)

【目的】

造血幹細胞移植は、周術期の副作用として口腔粘膜障害が生じ、疼痛や口腔乾燥、経口摂取量低下などの症状を引き起こす。周術期の適切な口腔ケアは、口腔粘膜症状の緩和や二次感染の予防など、患児のQOLや治療成績の向上に寄与する。今回、B前駆細胞性急性リンパ性白血病(BCP-ALL)患児に、周術期の口腔ケアを実施した症例を報告する。

【方法】

9歳女児、BCP-ALL再発のため化学療法と造血幹細胞移植目的で当院小児科に入院となり、周術期口腔機能管理目的で小児歯科受診となった。

【結果】

移植の3か月前から、乳歯の抜去と並行して口腔清掃指導と機械的歯面清掃を外来で実施した。移植月より無菌管理となり、往診にて口腔ケアを継続した。血液データを確認しながら清掃道具を選択し、骨髄抑制による易出血の時は、軟毛歯ブラシの必要性和清掃方法を患児と保護者に指導した。また、機械的歯面清掃は歯面のみ実施した。移植後は患児の全身状態と造血の回復、口腔有害事象や移植片対宿主病(GVHD)の発生の有無を確認し、口腔清掃方法と口腔内の保湿指導、口腔ケアを実施した。口腔乾燥、口角炎、頬粘膜の圧痕はみられたが、重度の口腔有害事象の発生はなく良好な状態を維持できた。

【考察】

本症例は、移植前から6か月間の歯科的指導を行うことで、患児と保護者との信頼関係を構築し、口腔清掃の意識づけを図ることができた。また、口腔ケアを継続することで、口腔内の疼痛や症状の増悪を防ぐことができた。造血幹細胞移植では治療後に慢性GVHD発症の可能性があるため、長期的な口腔衛生管理が重要である。

永久歯既製金属冠の長期予後についての後方視的研究

○今村圭吾, 福本志保, 西俣はるか, 近藤好夫,
日高 聖, 佐藤恭子, 西口美由季,
田上直美¹, 釜崎陽子², 藤原 卓
(長大院・医歯薬・小児歯,
¹長大病・特殊歯, ²長大病・小児歯)

【目的】

歯列発達過程の小児を対象とする小児歯科領域では、幼若永久歯の修復治療において既製金属冠を応用することがある。また、スペシャルニーズを有する小児の齲蝕治療では、全身麻酔などの薬物応用下で実施されることが多く、即日に全部被覆修復が可能な永久歯既製金属冠は、臨床的に非常に有用である。しかし、鑄造冠と比べ、冠マージンの適合性や物理的強度は明らかに不十分であり、適切な時期に鑄造冠への再修復が必要になる。

今回我々は、永久歯既製金属冠の予後について後ろ向き調査を行なったので報告する。

【方法】

2018年に当科受診した患者のうち、過去に当科にて装着した永久歯既製金属冠を有しているもので、かつ装着時の診療記録が残されているものを対象として調査を行なった。冠の損傷の有無の他、適合性、臨在歯との関係などを診査し、再修復の必要性を判断した。また、修復時の年齢、診断について、診療録上を調査した。

【結果】

58例の永久歯既製冠修復例のうち43例(74.1%)は、正常に機能しており、最長で12年4か月、平均で3年10か月経過していた。一方で15例は再修復を必要とした。その主な原因は穿孔で、その他脱離、慢性根尖性歯周炎、歯根完成に伴う再根管充填などの原因が認められた。

【考察】

永久歯既製金属冠は、平均で約3年10か月間正常に口腔内で機能していたことから、小児歯科領域では有効な暫間修復法であると考えられた。